

平成21年度石川県立大学公開講座

日時 平成21年11月 7日(土)14時から

場所 ジョブカフェ石川

共通テーマ：子どもの発達を考える

第1講座

子どもの社会的知能を育てる

石川県立大学 教養教育センター 金子 劭榮

人間のかしこさの変遷

人間のかしこさについては、昔からの我々の大きな関心事である。心理学の中でも、知能の研究とともに、それを測定する道具としての知能検査の開発が盛んな時期があった。知能研究の歴史は短いが、当初考えていた知能は、今考えれば非常に狭い範囲の能力を考えていた。

ただその当時から、知能検査で測定される知能は人間の知能を正しく測定しているか、知能検査で測っている能力は人間にとって大切な能力か、こんな問題で知能が測れるのか、等の疑問が出されていた。知能研究者たちは、検査で知能すべてを測定できているわけではなく、測定しないものにも重要な知能があると言いながら、人間の知能を代表するものであると説明してきた。

しかし、知能研究者や知能検査を開発する人たちの考えている知能だけでは、本質的な能力を把握していない、との疑問が大きくなり、知能或いは人間のかしこさに対する見直しが進んで来た。

米国とソ連（当時）との宇宙開発がきっかけとなって、それまでとは異なる知的能力、新しいものを考え造り出すのに必要であり役に立つ能力としての知的創造性への関心の高まりもあった。人間が共存するために必要な社会的能力も、知能の中で重要であると強調されるようになった。

新たなものを造り出すための創造的知能においては、予め決まっている解答を求める収束的思考のみではなく、解答の方向や枠組みを定めない発

散的思考が重要な能力と考えられる。その測定が複雑であることから、検査の開発は必ずしも爆発的には進まなかったが、この種の能力の大切さは多くの人が理解し、さまざまな場面でブレインストーミング等は盛んである。

1980年代に入ってから、スターンバーグらによる知的能力の再検討も当時注目された。

彼らは、知能研究者たちが明らかにした知能の構造が一般人のそれと必ずしも一致していない、むしろ相違している可能性に注目し、一般人が考える知能と知能研究者たちの考えるそれとの相違を明らかにしようとした。図書館を利用している人たち、買い物中の人たち、駅にいる人たちなどに対するインタビューによって、人間のかしこさをどのように認識しているかを尋ね、それを基に一般人の考える知能を明らかにしようとした。

インタビューによって、かしこい人たちの特性と考えられるものが多数集められたが、それらをさらに数十の（特性を表す）項目にまとめ、改めて一般の人たちと知能研究者たちに、それがかしこい人たちの特徴としてどれほどあてはまるかを尋ね、その回答を分析することによって、これらの人たちが考える知能構造を解明しようとした。

その結果、一般人の考える知能の因子の中に、知能研究者には認められない「社会的有能性」と呼ばれるものが見いだされた。このような一般人と研究者との間の相違が改めて明らかにされたことから、心理学者も、この社会的知能と呼ぶべき

能力に注目した。我が国でも同様の研究がなされ、大人にも子どもにも、同様に社会的知能に相当する因子が見いだされた。筆者も当時大学生を対象に、人間のかしこさで大切なものを自由に記述させ分類したところ、最も多い特性が「他人に対する思いやり」であったことを記憶している。

社会的知能の必要性

このように人間のかしこさを考えると、我々の理解は、狭い意味での知的能力に限定したものから、確実により広い範囲を考えるものへと変化している。その中でも、人間が他者と関わりながら生活していることとも関連して、他者とのかかわりに関する知識や技能の大切さに注目している。

EQなるものを強調したダニエル・ゴールマンは、ベストセラーになった「EQ：こころの知能指数」の中で、知的能力とは異なる「情動の知性」と呼ぶべき能力の重要性を説いている。この本の中にはこのことを主張するために具体的な事例が多く紹介されているが、例えば、マシュマロ・テストと称するものによって、幼児の我慢する力を見ようとし、その我慢力が将来のその子どもの学校の成績や社会に出てからの成功を予測するとしている。

また、知的に優れた者が、将来必ずしも成功していないことの原因として、この種の情動知能の欠如を指摘している。

従来 of 知能指数が極めて高い人間についての大がかりな縦断的研究があり、それらの人々が成功し失敗しているかについての情報を蓄積しているが、それによれば殆どの者は成功しているけれどもごく僅かの「特殊な事情」がある者については、必ずしも成功していないという。

ゴールマンの強調するところは、これらの特殊な事情を正面から考え、それこそが本質的なものであり、従来「特殊」として扱った事柄を、正面から取り上げるべき事柄として考えたところが新たな発想であろう。

ただ、ここで強調しておかなければならないことは、学校での学業成績に関係するから、将来社

会に出てから成功するか否かと関係するから情動の知性が大切であり、社会的知能が大切であるということではない。学業成績や社会での成功は、勿論とても重要なことではあるが、他にも人間にとって大切なことがあるのであり、人と快適に関わることができるか、自らが自分らしく生きることができるかという視点も、その大切さの判断には必要であり、その視点からもここの社会的知能の重要性を強調しておきたい。

数年前に石川県が実施した、県下すべての公立学校の児童・生徒（小学5年、中学2年、高校2年）及び小学5年生の親を対象にした意識調査がある。標本として選ばれた児童・生徒は1万人を越えるという大規模な調査であるが、調査内容としては、友達関係、生活意識・生活感情、ストレス、規範意識、家庭のこと、休日の過ごし方、日常における体験等である。

解明された多くの事実の1つとして、児童・生徒の自己肯定感、年齢とともに下降傾向を示し、ストレス感、増加傾向、快適さは低下傾向を示す、自己肯定感、学校での過ごし方、家庭での過ごし方と関連していること等がある。

現代の子どもたちの姿が課題とともに明らかにされたが、彼らの自己肯定感が家庭や学校における相互のかかわり、コミュニケーションと関連があることを窺わせた。つまり、石川県の子どもについても、相互に関わり合いがあることが精神的に安定させることを示している。

施設で育った子どもは家庭で育った子どもに比較して、その衛生的・栄養的環境はむしろ家庭よりも良いと考えられることさえあるにも拘わらず、子どもの発達におびただしい遅れや障害が見いだされ、ホスピタリズムと呼んでいた。この原因を探った結果、物的な環境の整備とは別に、養育者と子どもとの間の心理・社会的やりとりが不足していることが判明している。

いかに栄養のあるものを食べさせたとしても、いかに衛生的に整った環境の中で育てたとしても、話しかける、抱き上げる、ほおずりをする等、個別に関わりを持ったり、尋ねたり要求したりする

子どもからの働きかけにタイミング良く受け答えするという応答性が大切である。現在の乳児院などの施設、或いは保育所での保育などでも、このことについては配慮しているので、最近では施設で育てられたと言うことで発達に支障を来すことは極めて少なくなっている。

むしろ最近、心理・社会的に親になれない親が目立って、それらの親の子育ては必ずしも順調ではない。最近話題になる幼児・児童虐待、養育放棄等についても、身体的暴力が話題になることが多いが、それとは別にここでいう心理・社会的関わりが不足していることが少なくない。

これは大人の社会的知能とでも言うべきものであるが、このような不適切な子どもへの対応は、子どもの健全な社会的能力を育てることを阻んでいる。児童虐待や力によるしつけは、繰り返されると言われる。子ども時代に親からこのような虐待を受けて、時には表現のしようのないほどの不快感を感じたり大きな心理的外傷を受けたりするが、その一方で、それらがモデルとなってしまって、次世代へと伝搬される傾向がある。

子どもたちの中に、他者とともに生きるために必要な社会的知能を育てるには、親たちが悪いモデルとならないよう、地域等の指導が必要である。例えば、保育所の職員が、子どものみならず、地域の親たちへの指導を行っている。

日常生活での体験

先に述べたモデルによる子どもへの影響は、いわば意図的・計画的な指導によるものではなく、日常生活の中で知らぬ間に形成されるものである。

日常生活の中でのさまざまな経験・体験を通して、人間の社会的能力が育つ面がある。子どもたちにさまざまな体験をさせることの大切さがよく強調されるが、そのキーワードは実感であろう。ことばや理屈で教えることによって、子どもの知的理解は可能であるが、その大切さを実感を伴って理解できるとは限らない。

自然体験がよい、地域の行事に参加させることがよい、小さい子どもの世話をしたりすることが

よい、奉仕活動をさせることがよい、職場体験がよいとか、いろいろ言われるが、それらに共通して言えることは何だろう。

ことばや理屈の理解では気づかなかったことがあることを発見する、しかもそれは単に新しいことが追加されたと言うのではなく、大抵の場合、情緒・感情を伴う。予想もしなかったことが起こって、とても困った、とても嫌な思いをした、うまくできなかった、予想もしなかったことが起こって驚いた、他人に喜ばれた、感謝された、それが嬉しかった、これまでとは違った自分を発見した、自分が役に立ったという実感をした、等であろう。それらが自分にとってはまったく初めての経験であるということも少なくない。新たな発見、本物を見た感じ、驚き、感動等である。

体験は、現実での体験であり、自分の感覚で感ずる経験である。人から与えられたものを、そのまま理解することとは異なる。そのことが、自分を見直すことになり、人とのつながりを意識することになり、そのことによって新しい社会的能力を得ることになる。このことはことばや知識レベルでの理解では到達できないものである。人間はことばを持つ優れた動物であるが、ことばですべてを理解し把握することは出来ない。ことばで理解するとともに、ことばで表現できない世界に触れ、その世界を感じ取ることも大切である。

今の時代の生き方の中で

価値観の変化による生活様式の多様化に伴い、我々の考え方や感じ方に大きな変化が生じている。その代表的なものとして、他者とのかかわり方が変化してきている、希薄になってきている、かかわりのためのスキルが低下してきていると言われるものがある。

科学技術の革新的進歩があり、それが原因で人とのつながりが希薄になってきているとの指摘もあるが、むしろ人間が創造した科学技術の発展に、人間がついて行けない状況がある。

この視点から考えれば、我々は次々と出てくる最新技術の使いこなしを、もっと真剣に考えねば

ならない。ここでこの問題全体について考えることは、本題からずれるので控えるが、人との関わり方に限定しても考えねばならないこともある。先にも述べたとおり、人間にとって心理・社会的刺激の豊かさと応答性はとても重要であり、それが満たされた環境作りについては、真剣に考える必要がある。

近年の、コンピュータ技術、ネットワーク環境の充実ぶりは目をみはるものがあり、コミュニケーション手段も多様化している。それによる便利さも飛躍的に向上しているが、他方、多くの人々が指摘しているように、それらが人間本来のコミュニケーションの仕方を変え、人間のコミュニケーション能力を低下させている危険性もある。視点を変えて、この変化が人と人との間の社会的刺激の豊かさと応答性を増しているか否かを考える必要がある。例えば、携帯メールを、コミュニケーションの中でどのように活用するかは、現代人の課題である。

現代風の生活は、デジタル化にシフトした生活であるとも言える。デジタル化によって、ものごとが分かりやすくなる、処理が容易であるという、大きなメリットをもつ。デジタル化によって、映像や音が美しくなったり、ノイズが入らないという受け止めもある。その一方で、一部の独特の感性を持つ人たちは、現実のものを表現できていないとも言う。

人との関わりについても、デジタル化が進む可能性がある。それはどこまで可能だろうか、現在どこまで実現しているだろうか、その結果他者との関わりはどのように変化しているだろうか。例えば、接客の方法のマニュアル作り等がこれにあたるのであろう。そのデジタル化の適切さの議論もあるだろう。

学校教育などについても、実際の授業の中で担当の先生が教えることについても、自分の主観ではなく他人でも理解できるように明快に記述することを求められる。このデジタル化は一定の教育方法などの進歩をもたらしたことは確かだが、課題もあるようだ。

人間に関わる部分では、人間の感性が重要な役割を果たす部分が多いと思われる。今の時代のデジタル化志向とのバランスについては、必ずしも容易ではない。

まとめ

以上のように、子どもの社会的知能は大切なものであることを確認し、以下の配慮のもとに、子どもたちの中に適切な社会的知能を育てることが必要であると考えます。

第1は、当然、意図的・計画的に指導すること。年長の子どもについてはことばで教えること、理屈で理解させることも可能になるので、その方法を適用することも有効である。また、最近盛んになりつつあるSST（社会的スキル訓練）によって、社会的能力が獲得されることもある。対人関係は形ではなく気持ちが大切であるとも言われるが、形が出来てだんだんと気持ちがそれに加味されていく面があるので、その意味でも計画的なことばや理屈で理解させることは有効である。

第2は、親や地域の人たちが、適切な社会的行動をすること。繰り返し述べているように、子どもにはモデルになるので、子どもへの意図的な関わりとともに、適切なモデルとして行動することが必要である。

第3は、それと同時に、幼少の子どもについては、或いは年長の子ども（中学・高校生）であっても、ことばや理屈での理解だけで社会的能力が十分に育つとは考えられない。言い方を変えれば、ことばや理屈による理解を補強するものが必要であり、それが対人的関係を伴うさまざまな経験・体験である。

第4は、これとも関わって、必ずしも分かりやすくデジタル的に表示されていないものであっても、それを感じ取るような感性も育てる必要がある。分かりやすさを大切にする一方、形にとらわれることなく、感じあえる関係を造っていくことを大切にすることも必要である。